「鍼灸のエスノメソドロジー」のために

樫田　美雄・谷井　槙佑子・齋藤　雅彦
（文責：樫田美雄）

１．前史（調査を開始するまで）

本年度の地域調査実習は、「鍼灸のエスノメソドロジー」をテーマに実施した。このテーマ設定に関しては、２００６年１月７日から８日にかけて、大阪大学コミュニケーションデザインセンター主催で開催された『福祉・看護・医療に関する人類学ワークショップ』（池田光穂教授が担当者）において、高知大学医学部教授の佐藤純一氏からうけた助言の影響が大きかった。２年に１回廻ってくる調査実習のテーマ設定では、毎回頭を悩ませているが、今年設定した鍼灸のテーマは奥が深くてとてもよかったと思っている。

２００６年４月５日水曜日の「地域システムコースガイダンス」において、新２年生および、新３年生に授業概要を説明し、希望者を募った結果、谷井槙佑子と齋藤雅彦の両君が３つの選択肢の中から、樫田のこの実習を選んで応募してきたため、樫田を含めて総勢3名の調査チームが結成された。毎週金曜日午後の２コマを中心に調査研究活動を進めることとなった。

今回の調査のねらいは、「鍼灸」という、近年注目を集め、かつ、制度的背景の変化が大きい割には、学術的調査が不十分にしかなされていない対象を、社会学の観点からしっかりと把握し、その２００６年的実相を明らかにすること、であった。このねらいの背景を説明すれば、下記のようになろう。手元に資料がないので、数値は正確ではないかもしれないが、アメリカ等での調査によれば（鍼灸のような）「代替相補医療」には、総医療費の１０％内外の支出がなされているという。近代社会において医療費は巨額なので、この代替相補医療も大きな産業となることになる。もちろん主流の医療は「西洋医学」であるが、このように「非西洋医学」が大きな位置を占めてくる背景には、近年の疾病構造の変化があるようである。すなわち、西洋医学的積極的治療では目立った効果のあがらない「生活習慣病」が増えてきているなかで、人々が「ＱＯＬ（クオリティ・オブ・ライフ）」の向上を求めようとするとき、「代替医療」が選択肢になる、という構造があるようなのである（この部分は上記のワークショップにおいて、佐藤教授からうかがった話がベースとなっている）。もちろん、このような基盤的構造は日本も（先進国のひとつとして）当然に分かち持っており、かつ、日本での「相補代替医療」の重要な選択肢として「鍼灸」があるのであった。「鍼灸」、すなわち、「はり」と「灸」に注目が集まることの背景には上記のような構造的状況がある。

このような外的環境変化にともなう重要性増大と同時進行で、「鍼灸」を支える制度的内容にも変化が生じており、それもまた現在鍼灸を研究することの価値を高めているように思われた。「医療」の世界に選択肢を増やし、サービス業としての側面を強化していこうという、明示的非明示的な政府の方針転換が背景に（おそらくは）あって、近年は“「鍼灸の施術者」≒「視覚障害者」”という枠付けが実質的になくなってきており、鍼灸師養成の専門学校・大学は急増しつつあるようであった。この変化のなかで、『鍼灸教育場面』も研究の重要性を増して来つつあることが予想された。大量の、従来の学生層とは別の層からもやってくる「鍼灸専門学校の学生」に対して、どのような教育上の工夫がなされつつあるのか、というテーマを探究したいという希望は、そこで「ＯＳＣＥ」（一種の実地能力テスト）も行われているということを聞くにつれ、樫田のなかで強まっていった（樫田は現在「高等教育改革のコミュニケーション分析」というテーマで研究を行っている。その科研研究の枠組みとも連続するものがあるように思われた）。以上ような情勢と理解のもとで、我々は具体的研究テーマを「鍼灸治療場面の研究」と「鍼灸教育場面の研究」の２つに絞り、今回の調査研究活動を進めることとしたのである。

２．調査活動の概要－スキンタッチ運動調査、お灸のお接待調査、森ノ宮医療学園調査－

我々の調査はいまだ継続中であるが、大きく分けて３つの対象を持っている。第一の対象は「スキンタッチ運動」であり、第二の対象は「お灸のお接待」であり、第三の対象は「森ノ宮医療学園調査」である。以下、この順番に調査の概要を述べることとする。

まず、「スキンタッチ運動」から。

驚くべきことに、徳島県は、「スキンタッチ」という「鍼灸」の新しいムーブメントの発祥の地であった。「スキンタッチ」運動の技術的側面である「スキンタッチ」とは、「小児鍼」をベースに、特別の道具を使うのではなく、スプーンとドライヤーと歯ブラシをつかって、お母さんが子供の「疳の虫」をコントロールする技術である。「スキンタッチ運動」はこの技術を公民館等で開催する教室で広めていく運動であり、現在「子育て支援」の枠組みのもとで、全国各地で「鍼灸師の社会貢献活動」として進められているものである。我々は全くの飛び込みで（電話帳で探してお電話をした)、篠原新作先生（しのはら鍼灸院院長）と知り合うことができたが、篠原先生こそは、この「スキンタッチ運動」の幹部として全国的な活動をなさっている方であった。我々はまず篠原先生経由で「スキンタッチ運動」を知り、続けて「全国スキンタッチ協議会議長」の恒石真先生、篠原先生のお弟子さんの大崎一葉先生、東京でスキンタッチ運動を活動的に展開し、(個人でも東京で開業していらっしゃる）上別府芳子先生と、連続して知り合うことができた。この全員にインタビューを行ったが、そのうち、大崎一葉先生に学生の齋藤雅彦がインタビューした結果は、トランスクリプトが次章（第２部第２章）に掲載されており、そのもとになった音声は、ＤＶＤ中にＭＰ３というファイル形式で搭載されている。これらをみるならば、東洋医学基盤の鍼灸師を目指す現代のまじめな若者が、どのような感じで生きてきたのか、生きようとしているのか、そして、よい鍼灸師になるべく訓練を続けていっているのか、その一端を知ることができよう（他のインタビューの成果は、２００７年中に発表していくこととしたい)。また、スキンタッチ講習会の様々な場面で（徳島県上勝町、徳島県徳島市、大阪府大阪市）ビデオ撮影を行い、現在分析を行っている。

つぎに、「お灸のお接待」について。

上述の恒石真氏は、３月から１１月の間、お遍路さんを主たる対象に、八十八カ所巡りのうちの第一番のお寺である「霊山寺」(徳島県鳴門市）の一室をかりて（隔週日曜日に)、「お灸のお接待」という活動をしている。我々はこの調査において、実際の「治療場面」をビデオ撮りすることができた。調査は９月と１１月の二度おこなわれ、のべで１２時間分ほどの動画データを得ることができた。解析はまだ途中であるが、「鍼」を打っても痛みがないこと、を、一緒にやってきた友人に訴える「被施術者」のシーンなどが撮影されており、興味深い。(痛みがあることの表示だけではなく、痛みがないことも人は表示できるのである)

最後に、「森ノ宮医療学園調査」について。

「鍼灸治療場面研究」と並んで、「鍼灸教育場面研究」は、我々の調査のもう一つの柱であった。我々はそのフィールドとしての森ノ宮医療学園を、鍼灸におけるＯＳＣＥの実施についての指導を広くなさっている藤崎和彦先生（岐阜大学医学部教授・医学教育学）から紹介された。森ノ宮医療学園は、上記の恒石氏の通っていた学校でもあり、また、実務教育に熱心な先生方がたくさんいらっしゃることでも有名であった。我々は、この学校にあった（全国でただ一つの)『鍼灸ミュージアム』を見学させて頂き、「鍼灸実習」の授業を取材させて頂いた。授業調査においては、「からだ」を媒介になされるコミュニケーションがどのようなメカニズムでなされているのかが、探究テーマとなった。この成果も現在作成途上であるが、現在のような「初期的分析段階」においても、自分が被施術者である場合には「中空視線」を採用しているベッド上の学生が、自分を「共同学習者」とする際には、「患部」を見たり、そばにやってきた「教師」を見たりする、という「視線の秩序」が観察され、興味深い。

３．まとめ

ここまで、「鍼灸のエスノメソドロジー」研究のこれまでの進行状況を、その意義と合わせて書いてきた。鍼灸コミュニケーションにおいては、身体と鍼（あるいは灸）を用いた相互行為が中心であるため、分析は繰り返しのビデオチェックを必要とするものになる。したがって、繰り返しのビデオチェックが容易になるように、全ての動画データをハードディスクレコーディングされた形（ＭＰＥＧ２ファイル）に変換する所から作業を始めなければならず、この過程に思いの外時間を食われてしまった。しかし、現在６０ＧＢほどの動画ファイルを我々は所有するようになっており、素早くファイルを探して、データをチェックすることが可能になってきている。研究のまとめをいそぎたい。